

サリアから 111 キロを、頑張らず、諦めず、楽しみながら、7日間で歩くことにした



カミノ・デ・サンティアゴ＝サンティアゴの道
 を行く者は、必ず“クレデンシアル”＝巡礼者手帳を携行し、通過する町や村の教会やアルベルゲで“セージョ”＝スタンプを押して貰う。これが巡礼者であることの証明書となり、公設のアルベルゲでは僅かな寄付で宿泊が許され、時にはレストランや博物館などで“巡礼者割引”が受けられたりする。このクレデンシアルを携行し、最低条件“徒歩で 100 キロ、自転車または馬でなら 200 キロを、信心をもって巡礼を終えた者”には“コンポステラーノ”＝巡礼証明書が与えられる。



(写真上がコンポステラーノ 下はクレデンシアル)

(4) 巡礼第一日、サリアから ポルトマリンまで 22キロ

巡礼中は毎朝、出発時、宿屋の前で四人が向い合い、その日の意向を交代で祈ることにした。「応援してくれている家族、友人らの励ましと祈りに感謝しながら、我々夫々の思いをこの巡礼に捧げます。主よ、ともに歩いてください。聖ヤコブよ、導いて下さい」

10月21日(日) 昨夕、確認しておいた町の出口へ向かう。黄色いペンキで書かれた矢印を



ヘッドライトで探しながら進んだ。この黄色の矢印は街道の石畳に、道端の立札や石ころに、樹木の幹に、民家の石塀に、実に様々な個所に記されていて、巡礼者をサンチャゴ・デ・コンポステラまで導いてくれる。山道や林の中で、広い畑の道で、分かれ道で、村や町の曲がり角で、方向が分からなくなったら、迷ったら、この矢印を探し出せばよい。ヘッドライトの中に浮んだ矢印の方向に、真っ暗な闇の森の中へ入って行った。

重ね着の長袖シャツに防寒着を着込んで、石のでこぼこ道を上り下り、小さな橋の足元を注意しながら 3~40 分程進むとようやく空が白み始めた。朝もやの中に薄青い山並みがぼやけて見えた。

歩みの鈍い我々はどんどん追い越されるが気にしない。
「ブエノス・ディアス、ブエン・カミノ」＝おはよう、
よい巡礼の旅を、「グラシアス、ブエン・カミノ」＝
ありがとう、あなたもよい旅をと声を掛け合う。陽が
昇り汗がにじむ。昼間 20 度、寒暖の差が大。防寒着を
脱ぎ半袖の T シャツになる。大型の白馬 3 頭に跨った
巡礼者が石ころの坂を駆け上がる。**(写真右)**



女性が騎乗した 1 頭の後ろ脚の蹄が血に染まっていた。



サリアから約 3 時間、石ころの上り坂を右に
折れるとサンティアゴまで“100 キロ”の道標
は落書きで一杯。 元気なドイツ青年団 10 人が
追いついて来た。**(写真左)** 我々と同様、今朝
サリアを発ったのだが、サンティアゴまで 5 日
間で歩くという。賑やかに去って行った。

今回巡礼の 4 人組は、学生寮で同じ釜の飯を食った気心の知れた仲間である。巡礼の切っ掛けを作った竹内氏は元新聞記者、幅広い豊富な知識の持ち主。石川氏は T 旅行代理店の元米国支店長、旅慣れている。小野氏は C 光学機器メーカーの元豪州支社マネジャー。趣味はテニス、聖歌隊ではテノールを。 矢島氏は今回の巡礼組ではないが、我々の巡礼を援護してくれた。2005 年の夏に、700 キロを山本等 4 名と共に歩いた。夫妻でサラマンカに滞在 9 年、日西文化交流のためボランティアで働いている。(その後 2008 年 10 月、帰国)

途中、左足に違和感、靴を脱ぐと靴下に血がにじんでいる。前回の巡礼で痛めた同じ小指の古傷を手当て。ポルトマリンまで 9 キロ地点のフェレイロス村にある筈のバルで飲むカフェ・コン・レチェを思い浮かべた。「また上りかよー、どうせ下るんだから上らなきゃあいいのにー!？」



13:30、標高 700 メートルの頂上から谷の
向こうにポルトマリンの丘が見えた。その昔、
ポルトマリンの町は谷の底にあった。谷は湖
となり、町のシンボル、サン・ニコラス教会
は丘の上に移されて新しい町が出来た。湖ま
で落差 300 メートルの急坂を一挙に下って、
下って、また下る。足に負担がかかる嫌な下
り坂を 2 本のステッキで支えながら下った。
ベルサール湖に架かる長い橋**(写真左)**を渡る

と冷たい風がこちよ。橋を渡り終わると真正面に急な上りの石段が待ち受けていた。腰掛けてボカディージョを頬張っている若い女性2人組に声をかけ、石段をゆっくり上る。もう腹ペコ。14:00、大きなレストランは巡礼者や車でやって来た家族連れで混み合っていた。大皿に山盛りのミックス・サラダ、薄切り豚のオリーブ焼き、パン、ヨーグル付きで9ユーロ。「ああ美味かった！もう歩きたくねえー！」



丘の上のサン・ニコラス教会

この日の宿 Hostal Posada del Camino はサン・ニコラス教会前の広場に面していた。1階のバルのテラスでは先着の巡礼者がセルベッサ＝ビールを飲みながら午後のひと時をのんびりと過ごしている。早速シャワーを浴びながら同時に洗濯。外に出て洗濯干し場を探していると宿屋のお母さんが陽のあたる洗濯干し場に案内してくれた。(つづく)



ポルトマリンの丘からサール湖の橋を望む